

平成 24 年度 博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名（注：学位論文題名が欧文の場合は和訳をつけること）

脳血管障害者の ADL 自己評価と

作業療法士との評価差が回復過程に与える影響

—ADL 自己評価シートを利用して—

学位の種類：修士（作業療法学）

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻 作業療法科学域

学修番号 11896601

氏 名：岩尾 武宜

（指導教員名：大嶋 伸雄 教授）

注：1,000 字程度（欧文の場合 300 ワード程度）で、本様式 1 枚（A 4 版）に収めること

脳卒中の発症により何らかの障害を負った脳血管障害者（以下、対象者）は、動作の遂行の困難さについて認識が乏しいことは临床上よく見られ、作業療法の効果にも大きく影響を及ぼしている。しかし、対象者自身の遂行能力の認識と作業療法士（以下、OTR）による評価の差に焦点を当てた研究は少なく、その遂行能力の認識の困難さが ADL に与える影響を研究したものも少ない。

本研究では、対象者自身の自己評価と OTR による評価の差が回復過程に対してどのように影響するかの検証を行った。方法は、回復期リハビリテーション病棟入院中で知的に低下のない 8 名の対象者に対して最大 8 週間の継続的な評価を実施した。客観的な評価として機能的自立度評価表（以下、FIM）を使用し、自己評価として最も ADL 評価表として普及している FIM を参考に代表的な ADL 場面である移乗、トイレ動作、歩行の 3 項目に改変を加えた自己評価表（以下、ADL self-evaluation sheet : ADL-SES）を作成し、対象者の ADL の自己評価ツールとして使用した。OTR の評価との差の絶対値の経過を分析し、FIM において対象者と OTR との評価差を比較するため高利得群と低利得群に分けて分析した。また、対象者の自己評価の際に得られたコメントを群別に分け、KJ 法に準拠した方法で質的に分析した。

項目別の比較では「歩行」が他の 2 項目に比べ評価差が高いまま推移した。評価差を 2 群間で比較すると、低利得群では評価差が優位に高くなり、継続的な変化でも高利得群は評価差が低下していくのに対し低利得群は変化なしという結果となった。また、コメント内容の分析から高利得群は自身の行動や経験を客観視した判断が多いのに対し、低利得群では評価を通じてあまり変化はなく過信傾向が強い結果となった。

ADL-SES のような視覚的にフィードバックがある自己評価表は動作を想起しやすく、既存の評価では得られにくい対象者自身の認識を得ることができると考えられる。また、利得群別に比較することにより、評価差と対象者から得られるコメントの傾向を掴むことで ADL の回復過程における傾向を捉えることができたと考えられる。対象者自身が答える言葉にもさまざまな意味があり、意図を完全に汲み取ることは難しい。普段から耳を傾け、脳血管障害者との認識の差を考慮することは、ADL の予測とともに今後の介入計画にも関わることが示唆された。

ADL-SES は簡易的に作成した評価表であり、客観的指標として FIM を利用しているが評価者による差も考えられる。今後、評価法の改善とともにデータ数を増やすことで十分な結果として効果検証することが課題と言える。